

茶業試験場図書館

誌名	日本農学図書館協議会会報
ISSN	03858081
著者	黒瀬, 靖之
巻/号	21号
掲載ページ	p. 7-9
発行年月	1972年12月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



茶業試験場図書館

黒瀬靖之

1. はじめに

安政6年横浜開港とともに、輸出貿易の先陣として、日本緑茶がとりあげられたが、当時の緑茶の製法は、すべて手もみ製であったため、生産量に制約があり、また、茶園も、現在のような茶園ではなく、畦畔茶園が大部分で、年とともに増大する輸出数量を賄うには、大変苦勞があった。

明治29年に始めて、西ケ原に製茶試験所が開設され、茶について科学的なメスが入れられることになった。大正8年に至り、静岡県牧之原に茶業試験場が設立され、終戦後、一時東海近畿農業試験場茶業部と名称変更があったが、昭和36年、再び茶業試験場となり、今日に至っている。

このように、当場の歴史はきわめて古いが、図書資料活動については、昭和47年に至るまで専任職員もなく、本務の傍ら、細々とした活動が続けられ、刊行物では、茶業技術研究(昭和24年創刊)と研究報告(昭和28年創刊)の2種があり、今日まで続いている。

収書の面では、西ケ原時代の、*Standard Dictionary of the English Language* (1908)、*New Standard Dictionary of the English Language* (1914)の2冊があり、これが当場に現存する最も古い図書で、いずれも、縦32cm、横23.5cm、2500ページに及ぶ膨大な辞書で、当時としては破格の予算をこれに当てたものと思われるが、その後は図書購入はあまり行なわれていない。

昭和36年までは図書予算の大部分は、*Chemical Abstract*に使われ学術参考書の購入は微々たるものであった。茶業試験場再独立後は、ようやく学術誌の重要性が認

められ図書予算も、年々増加し、昭和39年の茶業試験場50周年記念事業の一つとして約100万円の図書の寄贈を受け、さらに、各学会刊行の逐次刊行物を大幅に増加購入することとなり、図書予算も年額100万円を越すようになった。

しかし、その後は予算面で、値上がり以外に多少の増額程度で、購入逐次刊行物数もほとんど増加がなく今日に至っている。

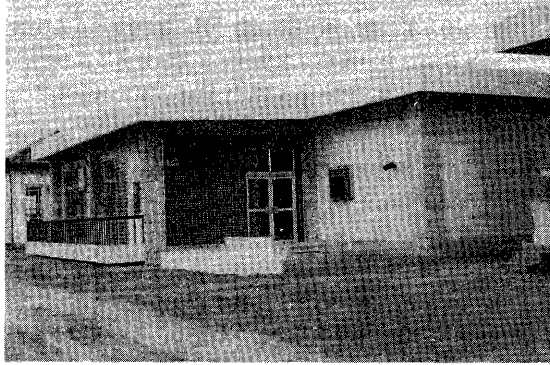
2. 図書館建設

年100万円余の予算でも図書の増加は著しく、さらに寄贈交換文献も著しく増加し、従前の図書室では収容しきれなくなったので、図書館の新設を要求した。昭和46年度に、約800万円の予算が認められたので、早速、図書館建設委員を選出した。他場所図書館の見学、あるいは諸先生方の図書館建設についてのご意見をうかがい、これらを参考にしながら図書館建設委員会が設計案を作成し、さらに本省営繕の手をわずらわせて、建築したので別図の図書館である。

設計の段階で特に注文をつけたところは、①建物を二分し北半分を書庫に、南半分に、閲覧室、事務室を設けること、②書庫の窓は東側と西側は窓なしとし北側に大きな窓を設けること、③床はビニタイルを貼ること、④書庫に除湿機を設置することの4点が主なものであった。

3. 図書の移転

昭和47年3月図書館の建築は完了したが、書架等の備品類購入は47年度予算であったことと、資料科の発足が5月であったことなどによって移転が遅れた。この移転と同時に、



玄関（東向）

各研究室保管の図書資料類の提出を求め、これらのカード作成、さらに従前調査した図書類の再検討を行ない、あわせて逐次刊行物目録作成の準備を行ないつつ現在に至っている。

4. サービス

従来は片手間に収書、刊行、貸出し、部外者からの複写依頼に応ずる等のサービスを行っていたが、資料科の発足により、専任1名、兼務1名、アルバイト1名の陣容も整ったので、9月から部内向けに収書通報の発行と、従来図書委員会で行っていた枕崎支場への文献複写サービス業務を吸収して資料科が担当することとした。

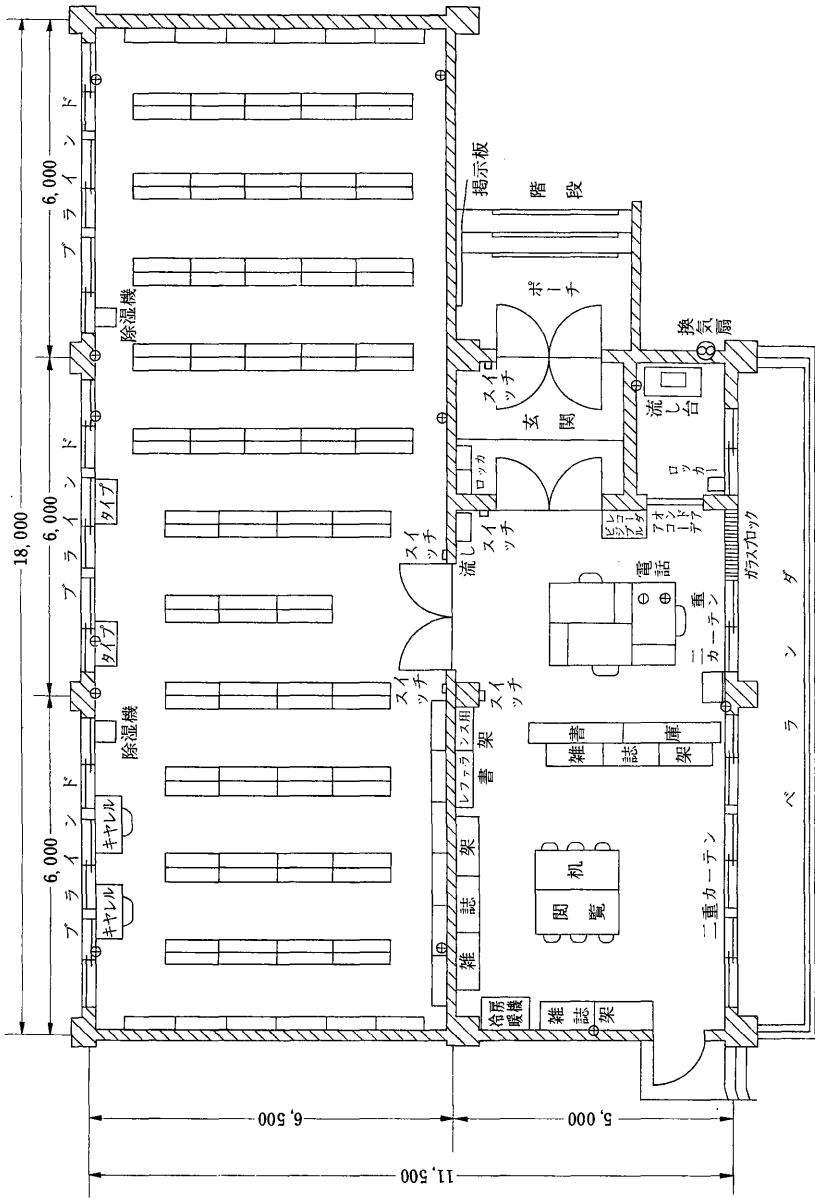
5. 新図書館についての感想

図書館といってもあまりにも小さく、他場所の図書館とは比較もできないが、この図書館には図でわかるとおり、複写設備を持っていないこと、倉庫がないことが他場所と著しく違っている点である。複写設備については場全体で共通して自由に使える複写室がありゼロックス420型を備えているので、大きな支障は感じていない。

図書館の建坪は鉄筋平屋建 $177m^2$ で、書庫は $117m^2$ 、閲覧室、事務室等合わせて $60m^2$ 、書庫とは壁で、閲覧室と事務室はスチール書庫および雑誌架で区分されている。書庫の東半分は従前からあった複式5連書架を、西半分には複式4連書架を配した。この西半分の北側は $1.25m^2$ の空地があるのでここにキャレル2台と、タイプ2台を配し研究者の便をはかっている。しかし、書庫内には暖房がはいらないので、冬期の使用は問題がある。除湿機2台によって夏期の高湿多湿時に使用したところ、本年は本に一度もカビが発生しなかった。

小さい図書館ではあるが、室内が非常に明るく、研究者に喜ばれる図書館ができたことは大変嬉しい。今後は、さらにサービス面の配慮と、収書の充実を図ってゆく予定である。

終わりに、この図書館建設について、貴重な意見をいただいた慶応大学の沢本孝久先生、東京大学農学部図書館の佐々木敏雄先生ならびに、技術会議事務局の方々と、図書館見学の際いろいろのご助言をいただいた方々に厚くお礼を申しあげる。



茶業試験場図書館